

聖婚式

結婚しようとするものはこの式文によって結婚の本義、神の恵みおよび夫婦の責務につき司牧者から学ばなければならない。司祭は公禱の時次の予告を二回する（一回は主日に限る）。但し教区主教の許可があるときは予告を省いてもよい。

「——と——遠からず結婚せんとす。もし故障を知る者あらば申し立つべし。これ第一会の予告なり。」結婚する者が在籍教会を異にするときは、双方で同一の予告をする。結婚の当日、新郎、新婦は立会人とともに聖堂に来て定められた所に、新郎は右、新婦は左に立ち、司祭は次のように言う。

愛する兄弟よ、今われら神と会衆との前に集まりたるは、この男とこの女に夫婦の神聖なる縁を結ばしめんがためなり。そもそも結婚は人いまだ罪を犯さざる前に神の定めたまひし尊きことにして、キリストとその教会の一体なることの型なり。キリストも自らガリラヤのカナにて婚宴につらなり、始めて奇跡を行ないてこれを祝したまい、聖書もこれを尊ぶべしとねんごろに勧めたり。ゆえに結婚はみだりに、軽々しくなすべきにあらず、神をおそれ、慎みてうやうやしくこれをなすべし。このふたりいま神聖なる縁を結ぶためにここにきたれり。もしこの結婚について故障ありと知る者あらば今ここに申し立つべし。しからざれば後日に至りてさらに何事をも言うべからず

次に司祭は結婚する人に言う。

我なんじらふたりに命ず。なんじら、もしこの結婚について故障あることを知らばこれを隠さず、すべての人の心の秘密あらわるべき、さばきの日に答うるごとく、今ここに言い表わすべし。神の言葉にそむきて結びたる縁は、神のそわせたもうにあらず、その結婚は不法なると知るべし

もし結婚の故障を申し立て、その証拠をあげる者があれば、結婚式を延期する。故障がない時は司祭は新郎に言う。

——（教名）なんじこの女をめとり、神の定めに従いて夫婦の神聖なる縁を結ぶことを願うか。又これを愛し、これを慰め、これを敬い、健やかなる時も病める時もこれを守り、その命の限り他の者に依らず、この女のみこそうことを願うか

新郎は答える。

我これを願う

司祭は新婦に言う。

——(教名)なんじこの男にとつき、神の定めに従いて夫婦の神聖なる縁を結ぶことを願うか。またこれに従い、これに仕え、これを愛し、これを敬い、健やかなる時も病める時もこれを守り、その命の限りほかの者に依らず、この男のみにそうことを願うか

新婦は答える。

我これを願う

司祭は言う。

この男にめあわすためにこの女をわたす者はたれか

ここで親またはその代理者は新婦の右手をとって司祭にわたす。司祭は受けて新郎に授ける。
新郎は新婦の手をとり司祭に従って言う。

われ神の定めに従いてなんじをめとる。今よりのち幸いにも災いにも、富にも貧しきにも、健やかなる時も病める時も、なんじを愛し、なんじを守り、生涯なんじを保つべし。われ今これを約す

両人手をはなす。新婦は右手で新郎の右手をとり、司祭に従って言う。

われ神の定めに従いてなんじをめとる。今よりのち幸いにも災いにも、富にも貧しきにも、健やかなる時も病める時も、なんじを愛し、なんじを守り、なんじに従い、生涯なんじを保つべし。われ今これを約す

両人手を放す。指輪を用いるときは、新郎は司祭の祈祷書の上に置く。司祭は指輪を祝福するとき次のように言う。

主よ、願わくはこの指輪を祝し、これを与える者と受くる者とを恵み、生涯、相愛して過ごさせたまわんことを。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

新郎は司祭から指輪を受けて新婦の左手の無名指にはめ、これを持ちながら司祭に指輪を用いないときは、指輪を用いないときは、かつこ内の語を省く。

父と子と聖霊の御名によりて、「この指輪をもって」なんじをめとり、わが物をなんじのものとする。アーメン

新郎新婦はひざまずく。司祭は言う。

我ら祈るべし

とこしえにいます神、万民を造り、万民を守り、すべての霊なる恵みをさづけ、限りなき命を与えたもう主よ、願わくは今主の名によりて祝するこのふたりのしもべに幸いを下したまえ。今「指輪をしるしとして」立てし誓いを常にまもり、互いに愛し、互いに親しみ、ともに主の律法にて従うことを得させたまえ。主イエスキリストによりてこいねがい奉る。アーメン

司祭は両人の右手を合わせて言う。

神の合わせたまえる者は、人これを離すべからず

次に司祭は会衆に告げる。「アーメン」は司祭だけが言う。

——と——(教名)夫婦の神聖なる縁を結び、神と会衆との前にて、ともに誓いを立て、かつ「指輪を授受し」互いに手を取り合いて証をなせり。ゆえにわれ父と子と聖霊の名によりて、彼らの夫婦たることを示す アーメン

司祭は次の言葉で、結婚した者を祝福する。

願わくは父なる神、子なる神、聖霊なる神、なんじらを祝し、常になんじらを守りたまわんことを。願わくは主あわれみをもつてなんじらを顧み、霊の恵みをもつてなんじらを飽かせ、むつまじくこの世を渡り、後の世には限りなき命に至らせたまわんことを。アーメン

次に新郎新婦は司祭に従い至聖所の入口に行つてひざまずく。その間に次の詩篇の一つを歌いまたは唱える。

詩百二十八篇

父と子と聖霊に栄光あれ
始めにあり、今あり世々限りなくあるなり アーメン

詩六十七篇

父と子と聖霊に栄光あれ
始めにあり、今あり世々限りなくあるなり アーメン

司式者 主よ、あわれみたまえ
会衆 キリストよ、あわれみたまえ
司式者 主よ、あわれみたまえ

次に一同、主の祈りを唱える。

天にします我らの父よ、願わくは御名を聖となさしめたまえ。御国をきたらしめたまえ。御心を天におけるごとく、地にも行わしめたまえ。我らの日用の糧を今日も与えたまえ。我らに罪を犯すものを我ら赦すごとく、我らの罪をも赦したまえ。我らを試みにあわせず、悪より救いくださいたまえアーメン

司祭 主よ、このふたりのしもべを救いたまえ

会衆 彼ら主にたよれり

司祭 主よ、天より彼らを助けたまえ

会衆 常に彼らを守りたまえ

司祭 彼らのために堅固なる城となりたまえ

会衆 彼らの敵を防ぎたまえ

司祭 主よ、我らの祈りをききたまえ

会衆 我らの声を主の御前に至らせたまえ

司祭 我ら祈るべし

次に司祭は言う。但し聖餐式を行なうときは以下の祈りを祝福の前に用いる。

天の父なる神よ、このしもべらを祝し、主の御言葉を学びてこれを行なわしめたまえ。願わくは、彼ら主の守りをこうむり、常に御心を従い、生涯主の愛におることを得させたまえ。主イエス^{キリスト}によりてこいねがい奉る。アーメン

新婦が子を生む年を過ぎているときは次の第一の祈りを省く

天の父よ、人のふゆるは主の恵みによれり。願わくはこの夫婦を恵みて子を生ましめ、又ともに長きよわいを保ち、操をまもり、互いに愛し、御心のままにそのこどもを育て、実栄えをあらわすことを得させたまえ。主イエス^{キリスト}によりてこいねがい奉る。アーメン

神よ、主は結婚を聖別し、これをもってキリストとその教会は霊なる結婚によりて一体なることを示したまえり。願わくは、いつくしみをもってこのふたりを顧み、主の御言葉に従いて互いに愛し、互いに敬い、つつしみと和らぎとを保つことを得させたまえ。主よ、彼らを祝して限りなき御国に至らせたまわんことを、主イエス^{キリスト}によりてこいねがい奉る。アーメン

司祭は次のように言って兩人を祝福する。

願わくは全能の神、なんじらに豊かなる恵みを注ぎ、なんじらを清め、なんじらを祝し、なんじらの身も魂も御心にかない、生涯相愛して世を過ごさせたまわんことを。アーメン

結婚した者は当日または、なるべく早い機会に陪餐しなければならぬ。

聖餐式

結婚式につづいて聖餐式を行なうときは次の特祷、使徒書、福音書を用いる。

特祷

天の父なる神よ、主は結婚によりてふたりの者を一体となしたもう。願わくはこのしもべらを清め祝し、忠実にその誓いを守り生涯相愛して安らかにこの世を過ごさせたまえ。父と聖霊とともに一体のの神にましまして世々統べ治めたもう御子、我らの主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。アーメン

使徒書 エペ五章二十五―三三

福音書 マル一〇章六一―九

夫婦の義務について説教がないときは司祭は次の勧告の全部または一部を用いてもよい。

勧告

すでに結婚したる者、または結婚せんとする者は、夫婦の義務にかかわる聖書の言葉を聞くべし

聖パウロ、エペソ書第五章に結婚せし者に命じていわく

夫たる者よ、キリストの教会を愛し、これがためにおのれを捨てたまいしごとく、なんじらも妻を愛せよ。キリストのおのれを捨てたまいしは、水の洗いをもち、ことばによりて教会を清め、これを聖なる者として、しみなく、しわなく、すべてかくのごとき、たぐいなく、清き傷なき尊き教会を、おのれの前に建てんためなり。かくのごとき夫はその妻をおのれからのからだのごとく愛すべし、妻を愛するは、おのれを愛するなり。己の身をにくむ者は、かつてあることなし。皆これを育て養う、キリストの教会におけるも、またかくのごとし。我らは彼のからのからだのえだなり。「このゆえに人は父母を離れ、その妻に合いて、ふたりのもの一体となるべし」。この奥義は大いなり、わが言うところはキリストと教会とを指せるなり。なんじらのおの、おのれのごとくその妻を愛せよ。又コロサイ書に次のごとくいえり

夫たる者よ、その妻を愛せよ、苦きをもてこれをあしろうな

又キリストの使徒にして、妻帯せしせいペテロが結婚せし者にいえる言葉を聞くべし
夫たる者よ、なんじらその妻を、おのれより弱き器のごとくし、知識に従いてともに住
み、命の恵みをもとに継ぐ者としてこれを尊べ。これなんじらの祈りに妨げなからんた
めなり

以上読みし言葉は、夫が妻に対してなすべき義務を示すものなり、次に妻たるものも、
夫に対してなすべき義務を学ぶべし。これも聖書に明らかにしるされたり

聖パウロ、エペソ書第五章のうちに次のごとく教う

妻たる者よ、主に従うごとくおのれの夫に従え。キリストは自ら、からだの救いぬしに
して、教会のかしらなるごとく、夫は妻のかしらなればなり。教会のキリストに従うご
とく、妻もすべてのこと夫に従え

また言いわく

妻もまたその夫を敬うべし

又コロサイ書のうちに次の短き教えあり。いわく

妻たる者よ、その夫に従え、これは主にある者のなすべきことなり

聖ペテロも良く教えて言いわく

妻たる者よ、なんじらその夫に従え、たとい、御言葉に従わぬ夫ありとも、なんじらの
清く、かつ、うやうやしき行状を見て、言葉によらず妻の行状によりて、救いに入らん
ためなり。なんじらは髪を編み、金を掛け、ころもを装うごとき、うわべのものを飾り
とせず、心のうちの隠れたる人、すなわち柔和、しとやかなる靈の朽ちぬ物を飾りとす
べし、これこそは神の前にて価とうときものなり。むかし神に望みを置きたる清き女た
ちも、かくのごとくその夫に従いて、おのれを飾りたり。すなわちサラが、アブラハム
を主と呼びてこれに従いしごとし。なんじらも善を行ないて、何事にもおののき恐れす
ば、サラの子となるなり